

才能教育研究会（スズキ・メソード）の新会長に 国際社会学者の中嶋嶺雄氏が就任



会長就任の経緯

—鈴木鎮一初代会長、豊田耕児二代目会長のあと三代の会長になられたわけですが、会長に就かれることになった経緯からお話いただけますでしょうか？

「豊田耕児先生は鈴木鎮一先生の後継者として、本当に大きなお仕事をなされたと思います。私の記憶では、鈴木鎮一先生の九十五歳の誕生日の記念コンサートが松本で行なわれた時に、挨拶に立たれた鈴木先生は豊田先生のことを何度も何度も推奨なさっていました。豊田先生は何と言っても鈴木先生が一番の秘蔵っ子でいらっしやいます。鈴木先生がご自身の全てをかけて育てられたわけです。」

そして豊田先生は鈴木先生の後継者として約十年間、会長をお務めになりました。豊田先生のご指導のおかげで、才能教育の大きなイベントのグランドコンサートにおいても、音そのものが本

当に良くなったことに象徴されますように、才能教育の音楽的なレベルは大きく向上しました。それは、国際的芸術家である豊田先生のお力の賜物だと思えます。

そのように十年ほどご指導いただいたわけですが、豊田先生はそもそも音楽家であり芸術家ですから、会長職というものからはできるだけ早く解放されたい、というお気持ちもあつたと思います。私自身は才能教育研究会の前身の松本音楽院の第一期生で、鈴木先生から直接ヴァイオリンを習いましたが、自分の専門の学問を修めるあいだは、才能教育研究会からはしばらく離れていました。でも鈴木先生の晩年からは理事としてお手伝いさせていただきました。私が筆頭常務理事のときに、理事にも定年制と重任十年の期限を設けてはどうかということを提案しました。その当時まで、鈴木先生をはじめ、ご高齢の先生方のご負担によって、会そのものが支えられていましたから、或る一定の時期が来たら、そういうこともあつて

鈴木鎮一没後一〇年、生誕一一〇年の今年、社団法人才能教育研究会では、会長が豊田耕児氏から、中嶋嶺雄氏に引き継がれた。新しい体制でスタートする才能教育の新会長中嶋嶺雄氏に抱負を伺った。

中嶋 嶺雄 会長 Nakajima Mineo

国際社会学者、国際教養大学理事長・学長。

1936 年長野県松本市生まれ。

1947 年松本音楽院（鈴木鎮一教室）入学。

1965 年東京大学大学院社会学研究科修了。社会学博士（東京大学、1980 年）。

東京外国語大学学長、国立大学協会副会長、アジア太平洋大学交流機構（UMAP）国際事務総長、財団法人大学セミナー・ハウス理事長、文部科学省中央教育審議会委員（大学院部会長・外国語専門部会主査）、内閣教育再生会議有識者委員、オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院の客員教授などを歴任。

平成 15 年度「正論大賞」受賞。『現代中国論』（青木書店、1964 年）、『北京烈烈』（筑摩書房、1981 年〈サントリー一学芸賞受賞〉）、『国際関係論』（中公新書、1992 年）、『21 世紀の大学』（論創社、2004 年）など著書多数。

いいのではないかと考えたのです。組織の若返りということですね。そして、実際そのような形になってきました。

豊田先生も十年お務めになって、そろそろ……というお気持ちがあったと思います。また、ご自身の音楽活動もありますし、ライフワークでもあるバッハの研究もあります。私はそのバッハ研究のことを豊田先生から相当詳しくうかがっているんですが、これまでにない真のバッハ論というものができるとは思いません。バッハに期待していても多数ありますが、研究者自身がバッハに本格的に取り組んだ演奏家でありながら、バッハ研究を新たに築かれるということは、本当に貴重なことだと思います。豊田先生はバッハの楽譜をほとんど全部持っていられるという点でも類をみないと思います。

バッハ研究に取り組みたいというそのような豊田先生の強いご希望もありまして、これはいつまでも大きな組織の頂点をご負担していただくのはどうか、ということになってきたのです。

そういう諸々のことがありまして、これは会長の交代のタイミングなのではないか、ということと、この一年半ほど、後任の会長を選考する委員会を私がチェアマンとして立ち上げたわけです。

勿論そのとき私自身は、後任の会長を私自身がお引き受けすることなど全く思ってもみなかった

ことです。だから選考委員会の座長をお引き受けしたのです。現に、秋田に国際教養大学というこれまでの日本にない新しい公立大学法人の大学をつくったばかりでしたから。ところが、会の中でもいろいろお話がなされましたが、豊田先生のよくな方の後を引き継ぐような人材は、すぐには見つからないのです。ですから、結局、皆さんの推挙もあって、私が引き受けざるを得ないことになってしまった次第です。

私としては勿論、松本は生まれ育った故郷ですし、才能教育にも愛着がありますし、ヴァイオリンもいまだに弾いています。新しい大学をつくって、ほとんど秋田にいたので難しいとは思いつつ、常務理事の方々の全面的なご協力が得られるというところで、結局私が会長になりました。そういう経緯だったんです。」

才能教育の草創期から

—— 幼少から過ごされた才能教育には、いろいろな思いや感慨深いものがあります。

「私が鈴木先生が院長の松本音楽院に入ったのは、昭和二十二年の一月。鈴木先生は、二十一年の夏くらいから松本の神田楽器店の二階で生徒を教え始めたんです。そのときはまだ松本音楽院という名称はなかったのですが、二十一年の秋口か

らは松本音楽院が下横田町の旧検番の木造家屋の二階建てを借りて始まりました。二十二年の一月、そのとき私は小学校四年でしたが、母に連れられて松本音楽院に入ったんです。最初に鈴木先生にお会いした場面も覚えています。ですから、本当に最初期からの関わりです。

豊田先生は鈴木先生の家に住んでいまして、私は、お兄さんのように「耕ちゃん、耕ちゃん」と言っていました。豊田先生と小林健次先生がバッハのドツベル・コンチエルトを弾いているのをよく聴いたのですが、それは素晴らしい演奏でした。そういう時代でした。」

幼児教育の重要性をふまえて

——会長になられた中嶋先生としてのこれからの抱負、方針というものは？

「私自身は、国際社会学、国際関係論や現代中国学の研究者としてやってきたわけですが、スズキ・メソッドとも強い関連があるんです。

正にこのところ、教育行政でいろいろ発言もしたりしているのですが、「幼児教育」の重要性ということに関しては、誰よりも強調してきました。自分の功績を言うわけではないのですが、中央教育審議会、内閣教育再生会議の議事録を見ていた

だければ分かることですが、スズキ・メソッドのことを何度も取り上げました。

そしてようやく才能教育の教育理念が文科省などの機関にかなりビルト・インされてきました。

その結果もあって、新しい教育基本法、これは日本国憲法よりも先にできて、なかなかいじることのできなかつた法律ですが、一昨年の十二月、安部内閣で六〇年ぶりに改訂されたときに、幼児教育のことが明記されているんです。学校教育と並んで言及されたのは初めてのことです。

幼児教育こそまさに鈴木先生が最初から強調されていたことです。著書の「愛に生きる」(現代新書、講談社)を読むと「義務教育以前の教育にすべての力を注いでほしい」と語っておられます。

その著書は一九六六年の出版ですから、今から四十年以上も前に鈴木先生は、そのことを言っておられたわけです。もつと言えば、実際には戦後すぐに鈴木先生は主張されているわけです。

でも、その当時から、日本の教育界は、その考えにほとんど見向きもありませんでしたし、文科省は学校教育ばかりに力を入れて、幼児教育、ブレ・スクールというものをほとんど視野に入れていなかった。

それが今、ようやく国の政策として視野に入ってきたわけです。この時期に、才能教育は当然再評価されるべきだと思えますし、これほど世界に

広まっている、発信力のある教育理念というものは、大事にしていかななくてはいけない。そういう意味では、この時期に私が会長に就任したのも何かの巡り合わせかなとも思っています。

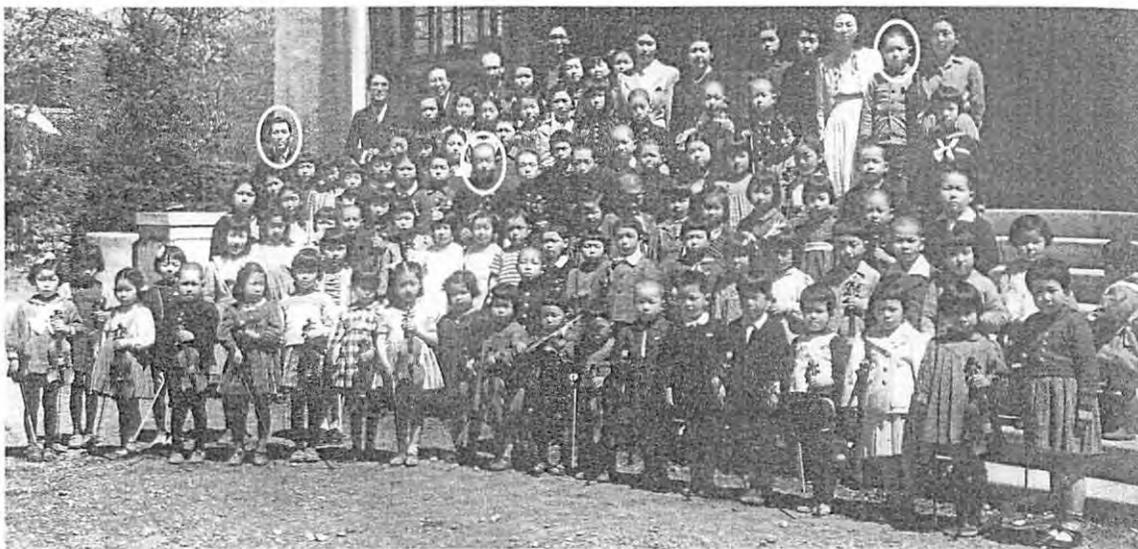
特に私は、幼児の英語教育についても、小学校への英語教育導入を強く主張してきました。音楽と外国語とは非常に相関関係があるんです。つまり、早いうちにやったほうがいいということです。早いうちに耳から聴いて覚えた方がいい。

初めから文法とか単語のスペルを覚えさせようとするから、日本人の英語はダメなんです。耳から聴いて自然に覚えさせたら一生忘れないですから。

外国語のコミュニケーション能力というのは、日本人が一番欠けているところです。十年間英語やってもほとんど英語が使えない。それで大学を卒業している。日本の英語教育そのものを抜本的に改革しないとイケない。スズキ・メソッドを活かすようなことをすれば英語も生きてきますよ。

そういう教育をやらなくてはいけない時期に来ている。才能教育の理念は、日本の教育の再建、まさに日本の教育の再生にリンクしているわけですね。

そういうことを思うにつけ、鈴木先生の教育理念に改めて感服しますし、この時期に私が会長として就任したからには、これまで以上にスズキ・



○は左から鈴木鎮一氏 中嶋嶺雄氏、豊田耕兒氏

メロッドを普及させるために努力しようと決意しています。」

スズキ メロッドの本質とは

—学校教育から音楽が無くなっているわけですが。

「いま、文科省は、知育、徳育、体育と言っていますが、それプラス情操教育、異文化教育、この二つを加えるべきだと私はいつも言っているんです。音楽には国境がないのでスズキは正に国境を越えて、異文化交流ができるんです。日本の教育全体をグローバル化していくことが必要ですね。」

私は国際教養大学をうち立てて、おかげさまでここまで順調に來ているのですが、それと同じことです。やっている場は違いますが、理念は同じです。

国際教養大学には特任教授としてヴァイオリニストの渡辺玲子さんがいます。大学教育に、できればスズキ・メロッドを取り入れていきたいと思っっているんです。それで、どういう形で取り入れていくかを今考えているんです。グローバル・コミュニケーション専門職大学院もできて発信力専攻もできています。正に日本の発信力としてスズキが果たす役割は大きいと思うんです。アメリカではスズキ・メロッドがいろいろな大

学で取り入れられていますし、学位論文にもなっています。そういう先生に來ていただいて講義をしていただく、それから渡辺玲子さんも私も、スズキ・メロッドとは何か、という講義をすることもできるでしょう。

スズキ・メロッドと言うからには、これは「方法論」でもあるべきです。私は学術研究会の座長としてまとめましたが、やはりスズキ・メロッドを単純化して言うのと、「暗記」と「繰り返し」なんです。これは鈴木先生が仰ったことで、言葉にするととても単純なことのようにだけでも、そのことよって「型」ができる。その「型」をきちんとつくることよって、今度は新しい創造力ができる。

戦後教育みたいに初めから、自由画で何でも自由に書かせて何かいいものが出來たとしてもそれは偶然であって、やはり訓練によつて築き上げたものがなければ本当の実力にはならない。そうすればひとたびそこを超えたら、自分のものになりますからね。そういう教育を日本はほとんどしていないんですよ。」

—義務教育の場で、そのような訓練がますます減ってきていますよね。

「そうです。音楽や図工の先生が肩身の狭い思いをしている。これはおかしいですよ。音楽や図

工こそ情操教育ですから。小学校、中学校で最も必要なものです。受験教科だけが学校の中心になっている今日の教育そのものを立て直さないと、日本は大変なことになりますよ。」

——才能教育にととまらず大きな視点で、日本の教育改革とということも視野に入れて、会長になられたという意味もあるのですか？

「はい、まさにそうです。その点では、私の役目がそこにあると思います。日本から世界に発信する才能教育研究会会長をお引き受けしたからには、そこは私に課せられた役目かなと思います。」

——教育理念に関してはよく分かりました。ところで演奏メソッドそのものは、今後どのようなものになっていくのでしょうか。

「やはり時代と共に、スズキ・メソッドはヴァージョンアップをしていくことが必要です。日々改革する、ということも継続しなくてはいけない。伝統と改革というものが両方あつてはじめて物事は動いていくわけで、伝統も大事ですが、その伝統だけに甘んじて自己運動を繰り返していると、世の中からは孤立してしまいます。その意味ではスズキ・メソッド自体ももうちょっと開かれた視

野が必要になってくると思います。」

改めて鈴木先生の先見性というものを

——外国の演奏家をインタビューすると、海外の才能教育出身という方の多さに驚きます。

本家本元の日本より、むしろ海外の方が、才能教育の理念をよく理解し、その良いところ取りをしているような気がしてならないのですが。

「それは、正に、日本の教育界というものが、如何に、一種の“教育ギルド”からなっていたか、ということの表われですよ。」

今回の大分の教員汚職の問題も日本の教育体制の悪弊がもたらしたものですよね。

だから日本の教育がいつまでたっても世界に開かれなわけですよ。そういう中で、鈴木先生はそういったこととは関係なく、実際に子供たちを育てて実績を作ってきたわけです。それをアメリカの人たちはよく理解しているし、アメリカの大学も次々にスズキ・メソッドを取り入れている。

鈴木先生の理念は、日本の教育ギルド的なものを超えたところにありましたから、日本の教育界ではなかなか受け入れられなかったということがあったと思います。

それから鈴木先生ご自身は、いわゆるアカデミ

ックな音楽学校を経験したわけではないんですね。だから音楽の世界に於けるアカデミズムみたいなところにとっては、鈴木先生の存在は眩しいと同時に煙たいものでもあったのですね。やっかみもあります。官と民ということで言えば、鈴木先生は全くの民ですよ。そういう事情もあつたと思います。

日本ほど官が教育を担ってきた国はないわけですが、それはもちろんそれなりの重要性もありましたし、評価すべき点もあるのですが、だけでも一方、日本というのは民間の働きや運動というものを認めない官主導の世界でした。特に教育界はそうだった。それがいま大きな転換期に来ているわけです。官だけではどうしようもなくなったのは明らかでしょう。

最近では、ようやく文科省も「ブレイン・サイエンス」、つまり脳科学に関心を持つようになりました。大きなプロジェクトに予算を使い始めるんです。でもそれはすでに外国では当たり前なことです。脳科学というのは非常に重要な分野なのに日本は遅れていきました。

そういう意味で鈴木先生の理念が再評価されています。特に「愛に生きる」は、才能教育の指導者の中でも最近あまり読まれていないのではないのかな、と思うのですが、私は改めて多くの人に読んでいただきたいと思います。

これは、鈴木先生が一番力を入れて書いて書いた本です。「鈴木鎮一語録」といったものは、会報などでもたびたび紹介されていますが、それとは別に、この「愛に生きる」は、鈴木先生の教育理念が纏めて書かれたものですから、是非、指導者の先生方だけでなく、広く一般に読んでいただきたいのです。

鈴木先生を知らない世代の指導者も多くなりました。私は子供の頃から鈴木先生のことを直接によく知っています。豊田さんのような演奏家ではないけれども、教育の世界ではそれなりのところに行きましたし、日本の教育をずっとみてきましたから、そういう意味での貢献を果たさなければいけない、と思っています。」

人類最高の英知が教材

——改めて鈴木先生の教育理念に感得されているわけですね。

「そうですね。特に先見性ですね。あのような時期にあれだけのことを松本で始められた。『どの子も育つ、育て方一つ』という教育理念が今や全世界に広まっているわけですから。大変なことですよ。改めて、日本は世界に発信していかねければいけない。それは大事なことです。特に今み

たいな、子供たちがインターネットやヴァーチャルな世界にまみれているこの時代に、鈴木先生の教育理念は大切に重要です。

しかも、この教育理念は、クラシック音楽といういわば総合芸術、つまり人類が一番高いレベルに達した十八世紀から十九世紀の芸術を教材としているわけですよ。

仮に二十一世紀にバッハやモーツアルトやベートーヴェン、ブラームス……のような音楽家が現われるのか、といったら、考えられないですよ。やはり、十八世紀から十九世紀にかけての音楽や芸術、文化……というものは、人類最高の英知にまで到達しているんです。それを「近代」と呼ぶわけで、それを継承していくということが大事なんです。

よくポスト・モダンなどと軽々しく言う人がいるけれど、モダンそのものが実に大事で、近代が生み出した芸術を、そう簡単に軽視してはいけません。そのバッハやモーツアルトに子どもが接して育っていく、ということは大変に素晴らしいことです。そういう育て方があるのに、一方で子供たちは、ゲームだ、インターネットだ、携帯電話だというところに行ってしまうとしたら、これは大問題です。それはともかく、その時期に人間の原点に触れることのできる才能教育、スズキ・メソードを強く推奨したいですね。」

取材/日

Inexpensive But Not Cheap

良いバイオリンも安いバイオリンも沢山あります。
安くて良いバイオリンを提供できればと思っております。

<http://www.rakuten.co.jp/sokone-gakkiya/>

子供バイオリン専門店・新品中古多数在庫

チャイルド・バイオリン
宮城県仙台市青葉区片平 1-4-6-1106
TEL.022-266-3257 FAX.022-264-4204